

神奈川県立生命の星・地球博物館

友の会通信

vol. 9, No.1, 通巻48号 2005. 4.10 発行

目次

会長・館長あいさつ……1	私の選ぶこの一冊……10
第9回総会報告……2	ライブラリー連載1……10
活動紹介・活動報告……3	情報クリップ……11
身近な自然シリーズ…4・5	サロン・ド・小田原…11
何でも好奇心……6・7	行事案内……12
バックヤード探検隊…8・9	

友の会の新たなスタート

会長 佐藤昭男

第9回総会で、二代目会長に就きました佐藤です。

1997年設立の友の会は8年目を迎えますが、当初から運営に関わり副会長を2期4年務めてきました。会員の皆さんには自然倶楽部の活動を通して顔馴染みの方もいらっしゃると思いますが、多くの面識の無い方々にも認めていただけるよう濱田会長の元で抱き続けてきた“友の会への思い”を膨らませ、新たな友の会の創造に向けて努力してまいりたいと思っていますので、ご協力を宜しくお願いします。



昨年末、学芸員の方々と一緒に友の会の在り方について意見交換の場を持ちました。このような機会は初めてです。博物館が存在しなければ私たちの活動もありえないのですが、その博物館を動かしている学芸員の方々と意識を合わせることが私たちの活動にとって重要なことであると気づき、積極的に行動することができたからだと思います。さらに博物館で働く多くの方々とも懇親を深めながら、友の会の役割を追求したいと考えています。2年の任期でどれだけ達成できるか分かりませんが、会員の皆さんに喜んでいただける友の会の創造に向けた新たなスタートに臨み、3つの目標を掲げたいと思います。

■博物館との連携を深めます

博物館と友の会の定例会を設けて、協働して課題解決に取り組みます。

■組織の強化を図ります

業務内容やスタッフの役割を明確にして、会計の採算が取れる経営的な運営を目指します。

■会員相互の交流を深めます

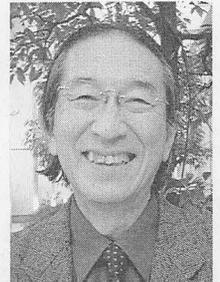
友の会通信やHPなどの情報を充実させ、会員のニーズに応えられる企画を案内します。

皆さんの応援をよろしくお願い申し上げます。

緊密な関係を新たに

館長 青木淳一

いい博物館には、いい友の会があると言います。本館もそうありたいと思います。一方的に利益を期待するのではなく、互いになくってはならない存在になってほしいものです。生物学用語でいうなら、片利共生ではなく、相利共生の関係になることですね。



昨年度に、友の会の会員の方たちと学芸員の人たちが、はじめて膝を交えて話し合いの場を持ったということは、共生関係を一步前進させることになるはずですが、もちろん、双方に熱心で活動的な人が何人かいることが大切ですが、できるだけ多くの人たちが協同事業に参画してくださることが肝要でしょう。

講座や観察会などの開催には、今でも多くの部分に友の会のお力添えをいただいています。さらに新しい企画が持ち上がることを期待しています。「こんなことは、どうだろう？」と、ちょっとした思い付きでも口に出してみてください。案外すばらしい企画に結び付くかもしれません。

自然系博物館の使命は、単に自然物に対する知識を深め、勉強してもらっただけではありません。来館者も迎える側も、ともに実物を通して自然の美しさ、面白さ、巧みさに感動し、生命の満ち溢れるこの奇跡の惑星に生まれた幸せに感謝し、地球に愛着を持ってもらうことだと思います。そのことからこそ、自然を大切にすることが芽生え、他人にも優しくする気持ちが育っていく。これはどんなお説教よりも効果があると私は信じています。

友の会の皆さんも、このような重要な使命を持ちながら、なおかつ楽しい博物館という施設に関わりを持ってくださることに大きな誇りを抱き、お力を貸してくださるよう、心からお願ひ申し上げます。



2004年度 第9回総会報告



承認事項、新役員と新組織について

2005年3月20日(日)に、第9回友の会総会を開催し、229名の信任を得て、審議を無事終了いたしました。会員の皆様には、ご協力をいただきありがとうございました。昨年度からさらに充実したパワーポイント画面を利用し、より見やすく分かり易い説明を心がけましたが、出席された方々のご感想はいかがでしたでしょうか。

さて、この総会で濱田隆士会長から佐藤昭男新会長へバトンが渡され、今まで築かれた土台に立ち、改めて神奈川県立生命の星・地球博物館友の会として将来への構想を描きながら、博物館とともに歩み、そして発展していくためのヴィジョンをもって臨む姿勢が示されました。規約改正の承認後、顧問に就任された濱田前会長からは、ごあいさつの中で博物館友の会の重要性についてメッセージをいただき、青木館長からは、この博物館を支える友の会への期待が語られるとともに、広報部事業計画にあります



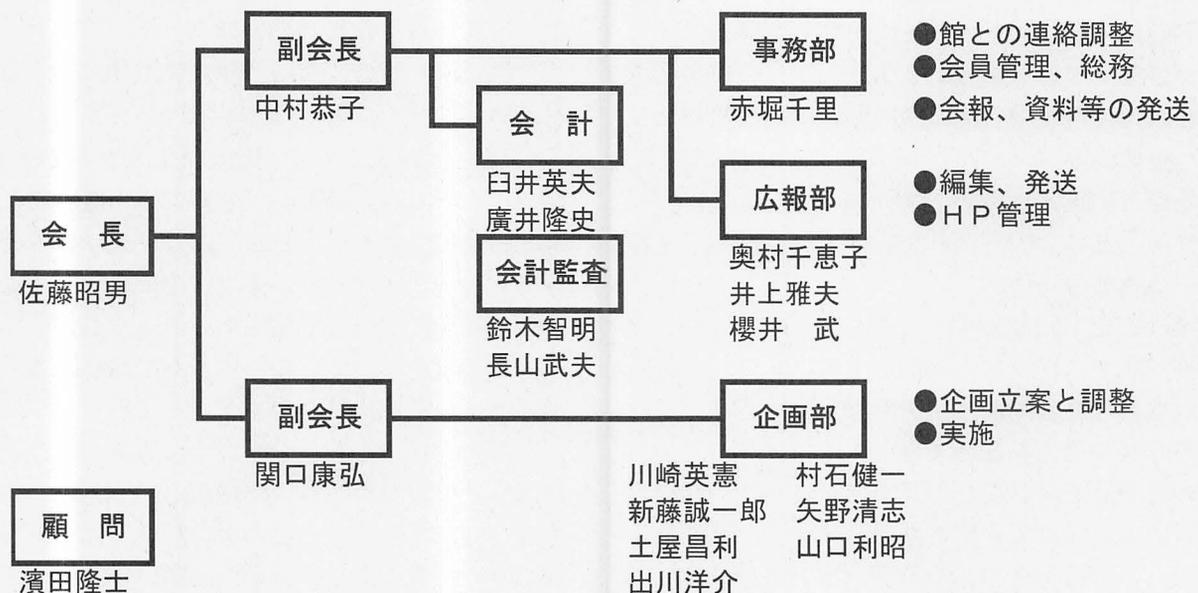
印刷物の編集、発行の資金としてご寄付をいただきました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

○ 会員の皆様に、議案について決議されたことを下記の通りご報告いたします。

- 1) 2004年度の事業、決算(収支)、監査報告について、議案書の通り承認されました。
- 2) 規約改正案について、議案書の通り承認されました。また、会場からは今後の友の会発展へのアドバイスをいただきました。
- 3) 2005年度役員立候補者について、当日配布の資料(候補者紹介)の通り承認をうけ、紹介されました。
- 4) 新組織体制については、当日配布された資料(友の会新旧組織図)をもとに、旧体制時の状況からさまざまな変化に伴って対応できなくなった現状、新体制への改編について解説をいたしました。
- 5) 2005年度予算案、事業計画案について、当日配布の資料(予算案差替え)と議案書の通り承認されました。

総会当日に配布いたしました資料は、2004年度収支報告と決算書(議案書にあった見込みと差替え分)、2005年度予算、新旧友の会組織図の3件です。別刷で同封いたしますので、ご確認ください。

友の会運営組織図



2005 友の会活動紹介

「自立した運営」と「一体感のある組織づくり」を目指して活動します。

●事務局

博物館と友の会の連絡・調整、お問合せの対応、入会や継続加入などの諸手続き、プライバシー保護などの情報管理、会報や資料等の発送などが役割です。会員が楽しく活動できるよう支えています。今年度の課題は、会員の誰もがスタッフとして活動できるように、事務作業のマニュアルを作成します。また今後の友の会の在り方を検討する会の設置を図ります。

◇募集！スタッフ 資料作成や発送作業など当日のお手伝いを求めています。(詳細は12ページ掲載)

●広報部

友の会通信の編集、発行ほか会員や会員外の方々への情報発信が役割です。今年度の課題は、「何でも好奇心」というコーナーで展開している“自然科学の不思議を学芸員と一緒に楽しく学ぶ”ことを充実させてくことと、会員と会員、会員と運営陣、会員と博物館をつなぎ、コミュニケーションの場づくりを進めることです。ホームページでは、積極的に外部へも活動をアピールしていきます。

◇募集！HP制作 「会員みんなで作る」をテーマとした新しいホームページの立ち上げを計画しています。コンテンツの制作およびモニターとしてご協力いただける方を募ります。

●企画部

観察会や講演会などの企画を立てて開催し、自然科学に興味関心をもつきっかけをつくり、より深めていけるようサポートします。また会員相互や博物館との交流、会員外対象のオープン企画を通じて仲間づくりをします。今年度の課題は、今まで分科会で担ってきた運営をまとめて企画運営マニュアルを作成すること、2006年度の1年間の行事を企画立案することです。総会と会員同志が交流できるようなお楽しみ企画をあわせた“博物館周辺の身近な自然観察会&芋煮会”“星や蛍のナイトタイム観察会”など、新しい企画づくりをしていきたいと思ひます。

◇募集！企画案 「こんなことをしてみたい」というアイデアをお寄せください。(詳細は12ページ)

2004 友の会活動報告

◇ ミューズ・フェスタ 2005 ◇ 3月20、21日

開館記念日事業で、どのコーナーにもぎやかでしたが、なかでも「子ども自然科学ひろば」は人気があり、連日大盛況でした。友の会からは、活動紹介コーナーのパネル展示、ひろばの補助スタッフとして参加しました。



化石探し砂場、タッチャブルひろば、砂の地図づくり、河原の石ひろば・・・楽しい学びが一杯

ミクロ体験で何を覗いたのかな？

◇ 伊豆大島火山地学観察会 ◇

2005年1月15～17日 1日目：みぞれ混じりの暴風雨、2日目：穏やかな晴れ 参加者 39名

天候にかかわらずしっかり観察した。1986年噴火のC火口と溶岩流、火山博物館前の鍵層と838年神津島噴火のテフラ、地層大切断面、マールの縁が海に開いた波浮の港、火山岩頸といわれる筆島、裏砂漠、山頂火口などを観察。溶岩の中に銅のハロゲン化鉱物アタカマイトもお目にかかれた。

◇ 山北地質観察会 ◇

2005年3月27日 晴れて暖か 参加者 26名

川村城址から日向集落に降り、酒匂川を高瀬橋で渡って洒水の滝まで。伊豆半島が丹沢に衝突する時に、間の海溝に堆積してできた足柄層群の最下位の日向層とその上の瀬戸層を見た。断層もあった。

(以上報告2件 新藤誠一郎)

◇ 冬の丘陵を歩く・相模湖嵐山 ◇

2005年2月1日 晴れ 参加者 28名

神奈川県北部に位置する場所での、まだ花の咲き出さない冬の観察会であった。コースは短く設定し、普段あまり見る機会のないアサダ(カバノキ科)やフジキ(マメ科)を含め落葉樹を、主に木肌や冬芽をじっくり観察した。途中雪の上を歩いたが、けがをする人もなく下山できた。(佐々木シゲ子)

博物館周辺の身近な自然シリーズ(その8)

帰りの夜道はお楽しみがいっぱい

学芸員 瀬能 宏

●書くことがないよ

うーむ困ったなあ。博物館周辺の身近な自然といってもなあ。魚では観察会はやっていませんし、早川の淡水魚も多くを語れるほど詳しくないし。じゃあ専門の海があるじゃないか。すぐ近くに相模湾がある！ お得意の「魚類写真資料データベース」を検索すると、早川の海で撮影された魚が235種もヒット！ これを使えばすぐ目の前の海の魚についていくらでも語れるじゃん！！ でも皆さん、よく考えてみてください。海に潜って魚をみることが出来る人は当館の学芸員にだってそうはいないはず。そうなんです。海は近くて遠いのです。

ということで今回は私が開館以来約10年続けている夜道の動物ウォッチングと、同じく夜道で最近開眼した側溝の昆虫採集についてお話しします。

●夜道で出会う哺乳動物たち

南足柄市塚原の自宅から博物館まで約12キロ。私は箱根外輪山のすそ野に沿った農道や林道を自家用車で通勤しています(図1)。朝の出勤時は交通量も多く、車を止めてちょっと観察なんて悠長なこ



図1
夜のお帰りマップ。この道沿いはゴミの不法投棄が多く、不審者と間違われられないように車は見通しのよい場所に止め、エンジンを切らずにヘッドライトとハザードを付けっぱなしにしておく。

ももっとも側溝に顔を突っ込んで虫を探す姿はそれだけで怪しい。

とは危なくてできないのですが、夜も更ける帰宅時には同じ道沿いでいろいろな動物に出会えます。時間はだいたい夜11時から12時半くらいの間でしょうか。なぜこんな時間帯にと思われる方も多いでしょうが、それは深く詮索しないでください(汗)。

さて、真っ暗な夜道で車のヘッドライトに照らされて目に入ってくるのはなんと言っても哺乳動物たちです。中でも特に多いのはタヌキ。林が隣接する広城農道沿いや辻村植物公園付近の道沿いではほぼ周年、それもかなりの頻度で見られますが、冬場は気温が高い日に限られるようです。どうも側溝や路上に這い出してきた小動物を食べている様子。普通単独ですが、2~3頭のことも稀にあります。広城農道沿いでは路上で轢死体になっている頻度も高く、親子なのか、まとめて3頭が轢かれていたこともあります。こんなに轢かれてしまって、いなくならないのでしょうか？

タヌキとともによく出会うのはハクビシンです。特徴の眉間の白い帯を運転中に確認できることはあまりありませんが、ネコよりも大きく、体と尾が細長いのですぐに識別できます。林や畑が隣接する道沿いだけでなく、舟原や中久野あたりでは民家の庭先に逃げ込む姿もよく見かけます。広城農道沿いには特に多いようで、側溝から飛び出してくる姿を見ることから、落っこちた小動物を食べ漁っているようです。いつも単独で行動していて、個体数が多い割にはタヌキほど轢死体をみることはありません。ただ、私が運転する車の下に入ってしまったことが過去に2回ほど…(合掌)。

アナグマはタヌキにそっくりです。私にはまだ一瞬で両種を見分けることができません。なかなかこっちを向かないので、特徴の長い鼻先と目を横切る黒い帯を確認できず、いまひとつ認識不足で苦労しています。足早に逃げるときの姿がタヌキは「ころころ」、アナグマは「もこもこ」した感じじゃないかなと思っているのですが。出会う場所は限られ、辻村植物公園を抜ける道沿いで遭遇しています。轢死体を同じ場所で2回見っていますが、その時は顔の特徴をじっくり観察できました。

ノウサギはアナグマと同じく辻村植物公園付近の道沿いで時々みかけます。ごく最近では水之尾にも現れました。辻村植物公園から山山へ下る農道の途中では出会う頻度が高く、2羽同時に現れたこともありました。ここではイノシシを一度だけ目撃し

ています。どうも車道に姿を現すことは普通ないようです。ニホンザルも夜はめったに見かけません。中久野の部落内で道を横切の一頭を目撃したことがあるだけです。広谷学芸員がまとめた解説書には夜は眠ると書いてあったので、ひょっとして新発見!?

● 側溝の昆虫採集にはまる

野生の哺乳類をこれほどの頻度で目撃できるなんて、少なくとも私にとっては新鮮で驚きの連続です

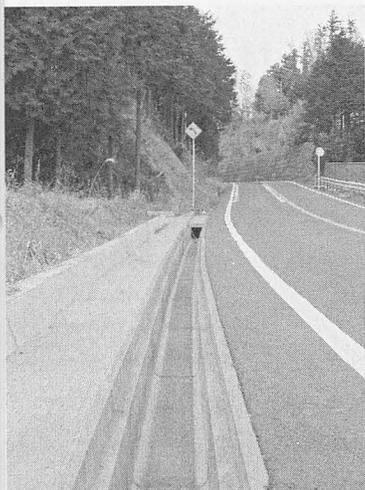


図2 広域農道沿いに整備された側溝。夜になるといろいろな小動物が左手の荒地からはい出してきて落ちこちる。道路標識の先の斜面ではハクビシンが頻繁に出没する。

た。暖かい季節にはそれこそ毎日何かしらに出会えると言ってもよいでしょう。そんな私をさらに驚かせてくれたのは、側溝の小動物たちでした。

普段は何気なく通り過ぎていく道路の両脇に続く側溝(図2)には、夜になると隣接する林や畑、荒地などから這い出してきたミミズや夜行性の昆虫(歩行虫※)などが落ちこちます。また、ムカデやクモのように餌を狙ってうろついているといったほうが正しいものも少なくありません。中でも多いのはオサムシやゴミムシの仲間です。これらの小動物を見るには車を降り、懐中電灯で側溝をのぞき込むのですが、ただ見ているだけではまったく名前がわかりません。高桑学芸部長や苅部学芸員の指導を仰ぎながら標本を作り、図鑑や専門の資料と見比べて名前調べにも挑戦しています。

昨年、辻村植物公園から舟原へ抜ける広域農道が整備され、帰りの夜道の楽しみにこの「側溝の昆虫採集」が加わりました。これまでも毎年夏になると水銀灯や樹液に集まる昆虫は必ずチェックしていましたが、側溝の昆虫採集はまさに「目からうろこ」ものの衝撃でした。いきなり県のレッドリスト

にも掲載されており、高桑学芸部長も最近では採集したことがないというセアカオサムシが採れたのです(図3)。これに気をよくして昨年4月から11月までの間に、約60種のオサムシやゴミムシの仲間を採集することができました。中にはあこがれだったヒメマイマイカブリや図鑑にも少ないとされているアカガネアオゴミムシなども含まれています。ほんのわずか寄り道するだけでこんな世界が開けるとは…。ただし、苅部学芸員によると、新しい側溝では最初の2年くらいはいろいろ採集できるけれど、這い上がれない虫はそのうちなくなるとのこと。保全のためには虫が落ちこちない工夫が必要ですね。

● 視点を変えて楽しもう

そこに何がいるのかを知り、そしてこれまでに見たことがない生物に出会えることのおもしろさを実感できたら、どんなにすばらしいでしょう。日常生活の中でそれが実践できれば、無理なく自然に対する理解も深まり、豊かな自然観を育むことができるのではないのでしょうか? そんな自然への接し方の中で、専門家も知らないような新しい発見があれば、

やりがいも一層出てくるといいます。幸い私たちの博物館の周辺にはまだまだ知られていない自然がたくさん残されているようです。幸い私たちの博物館の周辺にはまだまだ知られていない自然がたくさん残されているようです。

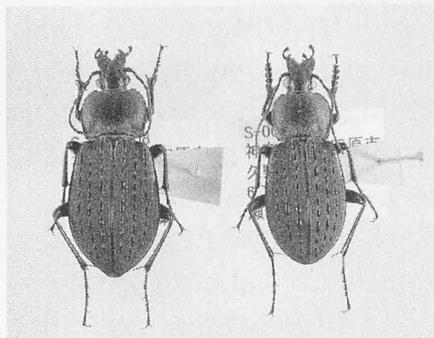


図3 全国的に記録が少ないセアカオサムシ(左が雌、右が雄)きれいに足を整えてマウントし、ラベルを付けて博物館に寄贈すれば資料収集やレッドデータ調査にも貢献できる。

時間、方法など、ちょっと視点を変えればすぐにそんな発見があるかも知れませんよ! えっ、そんな夜遅く林道や農道をうろうろしている奴っておまえくらいのもんだろって。「…」。

※注) 歩行虫=オサムシ科甲虫の別名で、後ろの羽が退化していて飛ばず、地面を歩いて移動するものが多い。

◆◆ 何でも好奇心・投稿編 ◆◆

自然科学の言葉「タケとダケ」

ダケだけでわかる話

学芸員 木場英久

私事ですが、今年は仕事始め早々に風邪を引いてしまい、博物館を8日も休んでしまいました。毎朝8時半に「今日も風邪が治らなかったからお休みします」と電話をするのが無念でした。布団に包まって安静にしていなければならなかったのですが、本当にもうんざりするほどテレビを見ました。大企業のCMはいろいろな時間帯にいろいろなチャンネルで流れるので、同じものを何回も繰り返し見る羽目になります。そのなかに某電話会社のCMがありました。「ド○モダケ」というキノコの形のぬいぐるみが出てきて、こんなサービスをするのは「ド○モだけ」と宣伝しているのです。咳のしすぎで痛いのをなでながら「わずか2文字が重なるだけのダジャレで、それほど奇抜なものではないなあ。この程度のダジャレであれば某学芸部長でも思いつくようなレベルだなあ。」と、久しく会っていない同僚を懐かしく思いながら、あることに気がつきました。「正しくは…ド○モダケじゃあないか…」。寝たきりの私は、間違ったことを連呼する俳優さんを見て、意地悪にもにんまりしてしまいました。

キノコの和名の語尾にタケがつくときには、シイタケとか、ベニテングタケとか、スギヒラタケのように濁点がつきません。このことは菌類担当の出川さんにも聞いて確かめたので、きっとこれは正しいことでしょう。八百屋さんでエノキダケとっているものも、図鑑をみるとエノキタケとなっています。その一方で、竹の和名の語尾は、マダケ、メダケ、ナリヒラダケのように必ずダケと濁るのです。竹は詳しくありませんが、イネ科担当の私がいうのですから、信じてください。



イラスト
知志子



さて、ここからが本題。暇を持って余していた私と正反対で、博物館の電話交換手さんはたいへんなお仕事です。たくさんかかってくる問い合わせの電話を、質問の内容を聞いて、正しく21人の学芸員に振り分けなくてはなりません。

直接に苦労話を聞いたことはありませんが、おそらく、たとえば、○○トンボの問い合わせだったら苅部さんに、○○石の問い合わせだったら地学の誰かに転送するという具合に、物の名前の語尾をもとに担当者を考えているのでしょう。交換手さんは実に的確に判断をされているようで、私のところに他の学芸員が担当すべき質問がまわってくることは、ほとんどありません。

でも、そんな優秀な交換手さんでも、たとえば○チョウの問い合わせだったら、鳥についてなのか、それともチョウチョについてなのか、名前だけでは判断できないでしょう。ほかにもヤマトシジミとか、ハチノスイシとか、ニワホコリとか、ミヤマクワガタとか、交換手さんを惑わす例はたくさんあります。たいへんなお仕事なのです。

《突然ですが、クイズです。この4例、それぞれの分野の担当に電話を取り次いだらよいでしょう。正解は欄外のとおりです。》

そういう状況の中でも、キノコと竹については名前の語尾だけで区別がつくようになっているのですから、たかが濁点の有無と、おろそかにできる問題ではありません。もしかしたら交換手さんも、あのCMをみてピンときたのではないかと思います。

あれから何ヶ月も過ぎてしまいましたが、毎朝「お休みします」と電話をすると「お大事になさってください」と優しい言葉をかけてくださった交換手さんに、この場を借りて感謝と敬意を表したいと思います。

正解：ヤマトシジミは貝の仲間にも、チョウの仲間にもあるそうです。ハチノスイシは海藻の仲間です。○○ホコリという名前は変形菌によくあるのですがニワホコリはイネ科植物です。ミヤマクワガタは昆虫でもありますが、ゴマノハグサ科の植物にもあります。

◆◆ 何でも好奇心・取材編 ◆◆

自然科学の言葉「生と性」

ウーム、どう違うんだろう？

一月半ば大島の火山地学観察会に、地学に詳しくない私がノコノコ出かけたのですが、『通信・46号』の「何でも好奇心」にあった「パホイホイ溶岩、アア溶岩って何？」という記事を読んでいたおかげで、講師の説明に、ああ、あれだ、滑らかな溶岩とゴツゴツした溶岩だ、こんなに早く実物が見られるなんて！ とうれしい経験をしました。

今回は「生と性」です。『46号』のもう一つの「何でも好奇心」の「巨大キノコ発生！…」の記事中で、「ニオウシメジは熱帯生のキノコ…」という文があり、通常「熱帯性」の方を目にする機会が多いため出川学芸員におたずねしたところ、その時は「ではより一般的な熱帯性で…」ということになりました。

でもどのように違うんだろう？

「何でも好奇心」でとりあげよう、との編集長命令で、改めて取材に行ってきました。

出川学芸員は修士論文の時にも苦労されたそうで、糞生菌など糞に生える菌を意味する時には決して糞性菌とはならないけれども、水生菌というと水に生えるわけではなく水中環境に生育するわけで、水性菌とは書かないし、一般的に発生環境に関する語は“生”を使う傾向があるようだとのこと。

まず紹介されたのが、文部省の『学術用語集』。自然科学の言葉を使う際これを規範として使っているそうで、早速調べてみましたが、「熱帯生」「熱帯性」いずれも出ていません。そこで木場学芸員、勝山学芸員、佐藤学芸員をも巻き込んで使い方を伺ってみた結果、「熱帯性」という場合、“性”は一般的性質や傾向を表わし、「熱帯生」の“生”には「生息している」「現在すんでいる」という、より限定されたニュアンスがあるのでは…、しかしヘゴなど木本のようなシダは本来「木性シダ」になりそうだけれども、実際には「木生シダ」という字が用いられていて、用語として既に確立してしまったものについては、性質を表わす場合でも“生”を使うのではないか、

ということになりました。

言葉に詳しい青木館長にも伺ってみることにしました。“性”は「～の性質を持つ（水性絵の具、病原性大腸菌、一卵性双生児）」、「～に限定される、～に特有な（森林性、山地性）」、“生”は「～産、～に生息する（陸生、海生、水生）」、「～の間生きる（一年生、多年生草本）」、「～で生まれる（卵生、胎生、実生）」、「～の形で生じる（対生、互生、群生、矮生）」、「～に生じる（湿生植物、乾生草本）」とのこと。「すんでいる」といった意味ではさらに“棲”もあり、海生、両生、陸生だけでなく、学会では固有名詞として「両棲類」を使っているというお話でした。

そこで、佐藤学芸員にも伺ってみると、無脊椎動物では「海生」、哺乳類では「海棲」、と使い分けていて（ちなみに海性は使われていない）、海生に対し陸生、さらに樹上性、地表性と分化していくとのこと。また以前は「生長」は植物、「成長」は動物の分野で使われていたのが、現在は「成長」に統一されたというお話でした。

いろいろな例が出てきました。再び出川学芸員に伺ってみると、「生と性」という言葉はある意味厳密な学術用語ではないため、明確な表現が要求される論文などでは「熱帯性（または生）」の代わりに「熱帯に産する」とか「熱帯に分布する」などより具体的にはっきりした表現をするし、生息する場所といっても、一生をそこで過ごす生きものもいれば、二つの場所を行ったり来たりするものもいて、種によって実に様々で、複雑な生物現象を表現する際、書き手と読み手とが十分に誤解なく意思疎通できる範囲で、ある程度の幅を持った広い言葉を使うこともあるということでした。

「生と性」がそうだったんですね。言葉は共通理解を得るための大事な道具ですから、取材を通じ、改めて大切に使っていきたいと思いました。

最後になりましたが、お忙しい中快く取材に応じてくださいました青木館長始め学芸員の皆様、本当にありがとうございました。

（広報部 奥村千恵子）

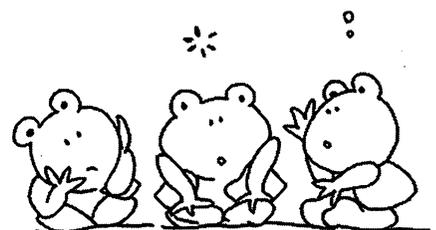
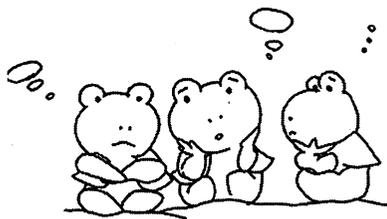


イラスト かなこ

◆◆ 博物館バックヤード探検隊 ◆◆

博物館バックヤード探検隊 パート2

1月23日(日)参加者12名

今回の探検隊は、前回見学することができなかった、博物館での具体的な作業・標本作りを見学することになった。お願いしたのは、当日「ダイバーのための魚類学講座」を準備されていた瀬能学芸員、標本作製のための解剖を予定されていた広谷学芸員、当日の申し入れに急きょ時間の都合をつけてくださった植物の勝山学芸員。

参加者は前回同様、主にオープンラボに参加している子どもたちと保護者。今回も「どんなことが見られるのかな?」と、わくわく、ドキドキで出発! となりました。

午前9時30分 3階にある実習実験室前に集合。まず「ダイバーのための魚類学講座」に参加。「今日は友の会の取材スタッフが見学しています」と受講者の方にご紹介いただく。全2日の講座で、この日は標本作製のための魚の処理、写真撮影と計測の実習があるとのこと。水道場では、ボランティアの方がいろいろな種類の魚を用意されていた。みんな自分たちで釣ったり、捕獲したりしたものだという。ボランティアの方は「魚大好き」のダイバーと研究者のみなさん。手順良くドンドン準備が進められていった。

★図鑑の写真は絶対ではない!?

今回の講座で主役をつとめる魚はサクラダイ。水揚げされたばかりで、色も形もすごくきれい。標本作製は、写真を撮影するために形を整えることから始まった。鱗の上の皮膚・粘液を流し、体をほぐし、正確に計測できるよう口を閉める。光が均一に当たるよう魚を水中に入れるのだが、バランスがとれるよう、注射器で浮き袋の空気を抜き取る。複雑な作業を瀬能学芸員はこともなげに披露してくれた。そして、背びれ・尾びれ・腹びれを注意深く虫ピンで固定し、ホルマリンで固める。バックに白色を使っているため、サクラダイの色がより一層はっきりした。ここで、カメラの露出を調整しながら撮影に入る。こんなに手間がかかるとは! 何気なく見ていた図鑑は大変な作業で作られているのだと感心した。が、実は「図鑑の写真は絶対ではない!」との



講座をサポートする魚類ボランティアのみなさん。いろいろなお話を聞かせてくださった。

こと。すべてがこのような手順で撮影されているわけではないそうだ。なかには「手抜き?」をして撮影されたものもあるとか…。目から鱗が落ちるとはまさにこのことだった。

★写真資料のデータベースを作ろう

魚類に関してはまだまだ未知な部分が多く、たくさんの写真資料が求められているという。ダイバーの方が水中で撮影する写真も貴重なデータなのだ。魚類の画像情報を登録できるシステムを持つのはわが博物館だけ。日本はもとより世界的なレベルだという。より多くのデータが蓄積され共有できるよう、ボランティアのみなさんはじめ多くの方が協力して作業が進められているという。

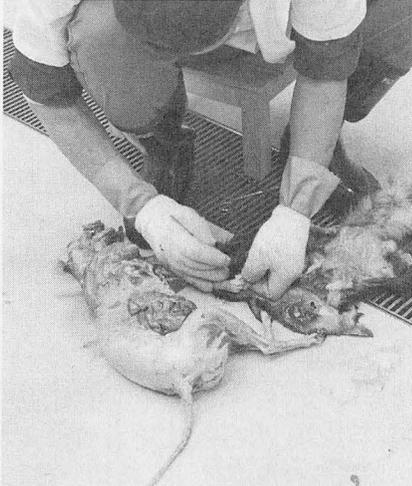
午前11時 3階から1階の大型標本製作室へ移動。事前に得た情報から、マスク・頭巾・ウインドブレーカーを着用して、元気よくドアを開ける。と、そこまでは良かったのだが…

★タヌキとハクビシンの解剖見学

今日の解剖は、自然保護センターで保護されて死んだハクビシンと交通事故死した箱根のタヌキ。ここでもボランティアの獣医さんが活躍中で、既に作業は毛皮をはいだところまで進んでいた。まだ解凍が完全でないためと気温が低いため、期待したほどの匂いではなかったが、子どもたちは何故か遠巻きに見学。

★男子は赤色がにがて？

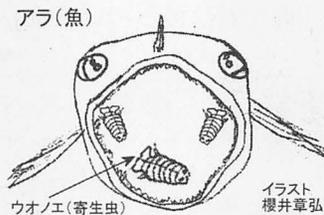
タヌキの筋肉の色は鮮やかだった。ハクビシンは厚い毛皮につつまれていた。大人たちは広谷学芸員による、骨の構造や役割等の話を聞きながら興味津々。野生動物の脂肪の少ない筋肉組織を見ながら、お母さんたちはうらやましげ（冬になると脂肪もつくそうですが）。「家庭では骨付きの肉で解剖の実習をするというですよ」とアドバイスを受ける。回りを見ると子どもたちは？「ちょっと外に出てもいい」「血の色が…」と、初めの勢いとは違ってきた。



ボランティアの方により解剖されるタヌキ。私たちと同じほ乳類。長い進化の過程で作られた体のみごとさに感動。解剖は「本物」を見ることが出来る貴重な体験。

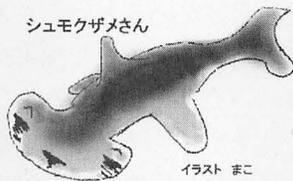
★魚にも寄生虫が…

と、突然電話がはいった。魚類学講座から、「寄生虫がいたので、見にきませんか？」とのお誘い。寄生虫はウオノエという節足動物で、アラという魚の口中にいたのだそう。魚のエラや体表に寄生するものもあるという。寄生虫のうち、注意しなくてはならないのは、鮭など川魚の体内にいる線虫の仲間。「生では絶対に食べてはダメですよ」と教えていただく。子どもたちはこの節足動物に熱中、手にとって観察していた。昆虫類と一緒に感覚らしい。もったいないかと水道場を物色中、シュモクザメを発見した。



★シュモクザメにコバンザメ少年隊

水族館でしか見たことのないシュモクザメ。子どもたちの興味はすっかりサメに移行。恐る恐る触って鮫肌の感触を体験。午後から標本にする事を聞きつけ、また来ることを約束する。



★植物標本はエンドレス

最後に勝山学芸員の案内で植物標本収蔵庫（収蔵庫2階）を見学した。収蔵庫の扉を開けると、きれいに整理された標本が並んでいた。20万枚程あるそうだ。植物の場合、乾燥標本が基本になるが、液浸標本もあるそうだ。一番古いのは1926年(大正15)、箱根にあった蔦屋旅館のご主人が収集したもの。古いものになると退色してしまっているが、写真ではわからない匂い・感触は残されていて、実物標本ならではの良さがあるという。また、乾燥の状態や、観察のために花を開くなどして壊してしまうことがあるため、個体差や分布の状況や地域間格差等を考慮すると、1種について20枚(最低10枚)もの標本が必要になるという。そのため整理は追いつかないくらい大変。まさにエンドレス作業となるそうだ。

植物ボランティアの方たちは休日には作業がないため、今日はその様子を見ることができなかったのが残念！ 本日の探検はここで終了となった。



勝山学芸員

1日にして3つのバックヤード作業を取材させていただき、探検隊一同なにやら興奮醒めやらぬ状態となってしまった。それぞれの分野での標本作製を見学し、学芸員の地道な仕事とこだわり、それを支えるボランティアのみなさんのひたむきな協力体制が実感できた。今日参加した探検隊員の中から、明日の博物館を支える若い力が生まれてくることを期待します。

(広報部 星野和子・鶴田知志子・櫻井武)

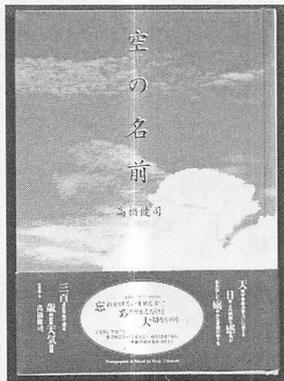
◆◆ わたしの選ぶ“この一冊” ◆◆

学芸員 新井田 秀一

『空の名前』

高橋健司(写真・文) 1992年・光琳社出版

雲は好きですか？ そして、日本語は好きですか？ 空を見上げたときに目に留まるのは、はぐれ雲、千切れ雲、飛行機雲…。雨を降らせる雲は雨雲ですね。富士山の上には、風の強い日に笠雲を見ることができます。また、春には朧雲、夏には入道雲、秋にはいわし雲など、季節感あふれる雲の名前があります。この本はそんな雲の名前を教えてください。



帯には「天候や季節の移ろいに対する日本人の感性が生み出した嫺(たお)やかな言葉の数々を三百点の写真で綴る歳時記風天気図鑑」と紹介されています。まさにこのとおりで、これ以上の紹介文を書く必要がないぐらいです。

この本の著者は日本気象協会にお勤めとのことで、雲についての気象学的な分類にも触れています。雲

は、高度と形によって分類されます。しかしこの本の全体としては、季節の移ろいとそれに伴う天気(雲、風、光、水、氷など)の変化を示す言葉について多くの美しい写真が紹介され、それに分かりやすい解説が付けられています。

一番の身近な自然、一番簡単に観察できる自然、それは「空」です。どこにいても、その気があれば観察できます。例え都心部にいても、ビルの谷間から見上げることができます。足元に広がる自然も大切ですが、この本を持って、空を見上げてみましょう。きっと、視野が広がるはずですよ。

色や光に関して興味をもたれた方へは、次のステップとして「空の色と光の図鑑」がおすすめです。虹や稲妻、オーロラといった空を彩る色や光の現象について、写真と図で解説しています(草思社、1995年発行)。

『空の名前』は残念ながら当館ライブラリーには収められていません(3/19 現在)。発行元の光琳社出版は1999年に倒産してしまったのですが、著作権を引き継いだ角川書店から同名の本が発行されています。

[地震雲は扱っていません、念のため]

◆◆ もっとライブラリーを楽しもう！ ◆◆

連載 1 ◆◆

司書 篠崎 淑子

ミュージアムライブラリーの特徴

ライブラリーは博物館の2階にあり、無料スペースです。観覧券がなくてもどなたでも自由にご利用いただけます。ここでは来館者が展示を観て疑問に思ったことや、さらに深く学習したいといったニーズに応えるために、自然科学系の図書や雑誌を自由に閲覧できるようにしてあります。

たとえば雑誌では、専門的な洋雑誌や和雑誌、同好会誌、学会誌などを購入や寄贈、交換といった形で収集し、来館者に自由に閲覧してもらえるように整理していますが、これはミュージアムライブラリーの特徴といってもいいでしょう。公共図書館で自然科学系の専門的な洋雑誌や学会誌を所蔵しているところは少ないと思いますし、大学図書館を利用できる人も限られてくるでしょう。もっと多くの人に利用してもらえよう、将来的には目録を作成して当館のホームページに載せるなど、何かの形で宣伝

できるようにしたいと考えています。

また、来館者の中には植物や昆虫、岩石や化石などを持ってくる方がいます。こうした質問に対してはそれぞれの専門の学芸員がライブラリーでいろいろ教えてくれるのですが、時にはライブラリーの図書を見ながら解説してくれることもあります。こういうところもミュージアムライブラリーの特徴と言えるでしょう。ですからライブラリーの図書や雑誌は館外貸出しをしていません。学芸員が調査研究のために研究室に持っていく時でも、『ライブラリー資料貸出簿』に記入していくことになっています。

最後にミュージアムライブラリーの特徴として、専任の司書がいるということです。自然科学系の博物館に図書室があって図書や雑誌を公開し、専任の司書がいるところというのはとても少ないようです。普段はライブラリーの奥の事務室で、主に図書や雑誌の整理をしています。図書に関する質問があったときはカウンターに出て来館者に対応しています。

◆◆ サロン・ド・小田原のご案内 ◆◆

第65回 サロン・ド・小田原

2005年6月2日(木)

「神奈川県昆虫は何種いるか」

平野幸彦(神奈川県昆虫談話会)

昨年の12月に神奈川県昆虫誌が完成した。これは神奈川県昆虫談話会の50周年記念事業として行ったもので、神奈川県に生息する全昆虫を網羅し、解説した昆虫誌である。A4判で、I巻からIV巻まで1,468ページの大冊で、執筆者は総勢44名におよぶ。総種類数は10,866種、甲虫種数は4,127種で、日本でもっとも多い記録数を誇っている。この昆虫誌は何を物語っているか、今後、神奈川県産の昆虫は何種記録出来るか、将来のファウナはどう変化するか、どうすれば自然環境を守れるかなど、甲虫類を中心にお話したい。

2005年度 サロン・ド・小田原の予定

6月2日(木) 「神奈川県昆虫は何種いるか」
 8月 「ホワイトリバーの化石たち(仮題)」
 10月 「ミュージアムライブラリーの楽しみ(仮題)」
 12月 「未定」
 演者は、入生田地域の話提供をしてくださる方を予定しています。
 2006年2月 「未定」

なお、講座の演目、演者については変更する場合がありますので、ご了承ください。

サロン・ド・小田原の講演では、学芸員や外部の研究者等により様々な話題が提供されるとともに、つづく茶話会では演者を交えた参加者同士の交流が行われています。このサロンは、どなたでも参加できる会です。

情報クリップ

★ 2005年(H17年)度 会費納入のお願い

第9回総会(3/20)において規約改正が行なわれ、次のようになりました。

【会員種別と会費】 正会員2,000円(同一世帯の方もご利用できます)賛助会員10,000円/一口以上(資金面で活動を支援する会員で、個人、団体どちらでも加入できます)

【記載事項の確認】 同封の振込用紙に金額と会員の住所、氏名、番号を印字してございますので、間違いがないかご確認ください。

【変更がある場合】 二重線で訂正し、変更事項を記入してください。お振込みは郵便局からお願いいたします。振り込み手数料(70円)はご本人さま負担となっておりますので、ご了解ください。なお、博物館1Fの総合案内カウンターでは現金でのお支払いを受付けています。来館の折にご利用ください。

★ 友の会役員を退任される方々(敬称略)

濱田 隆士、蛭子 貞二、入江 和夫、陣野 一郎
 町田 誠、横溝 吉香、陶山 幸子
 大変お世話になり、ありがとうございました。

★ 博物館職員の異動(敬称略)

企画情報部長	管理部管理課長
転入：二川幸夫	転入：佐藤晴久
転出：高畑充治	転出：上川哲哉

管理部管理課	管理部経理課
転入：西尾雄三	転入：橋本 隆
転出：海老原成介	転出：早川妙子

学芸部学芸員(地学)	非常勤学芸員
新採：石浜佐栄子	退職：今永 勇

★ 2005年度 友の会担当職員のご紹介

企画普及課	総合窓口	新井一政
企画普及課	事務	木村恭子
学芸部	企画	木場英久
学芸部	広報	田口公則

◆◆ 行 事 案 内 ◆◆

◆親子教室「砂鉄を集めよう」

【日 時】5月8日(日)

【場 所】博物館 ▶▶「子ども」

◆土壌動物観察会「土の中の虫ウォッチング」

【日 時】5月21日(土) 10:00~15:00

【場 所】実習実験室・博物館周辺 ▶▶「子ども」

◆植物観察会「初夏の高尾山を歩く」

【日 時】6月3日(金)

【場 所】高尾山

◆「早川の文化と歴史の探訪」自然観察会

【日 時】6月4日(土) 9:30~15:30

【コース】早川駅~石橋山~白銀林道~箱根湯本駅

◆地学観察会「三浦半島野比海岸」

【日 時】6月12日(日)

【場 所】野比海岸

◆夏休み自由研究「岩石標本を作ろう」

【日 時】7月23日(土) 10:00~15:00

【場 所】松田町河原・博物館

◆昆虫探検隊(宿泊連続講座)

【日 時】7月29日(金)~30日(土)

【場 所】富士五湖方面

◆夏休みオープンラボ「プランクトンを探そう」

【日 時】7月31日(日) 10:00~15:00

【場 所】実習実験室 ▶▶「子ども」

◆「水餓鬼を育てる! Part3」水辺の観察会

【日 時】8月6日(土) 10:00~15:30

【場 所】博物館横の早川河原 ▶▶「子ども」

▶▶「子ども」とは、博物館事業「子ども自然科学ひろば」のことです。友の会では、子ども向けのオープン行事を対象企画にします。助成により、平成17年度は参加費が無料となります。

◇ 次回の会報発送 7月8日(金) 10時より、会議室で行います。作業のご協力をお願いします。

◆第65回 サロン・ド・小田原

「神奈川県昆虫は何種いるか」

【日 時】6月2日(木)

【場 所】県立生命の星・地球博物館1F 講義室

【講 演】17:30~18:30 (1階西側講義室)

【茶話会】18:30~20:00 (1階東側講義室)

【参加費】講演のみの参加は無料です。

茶話会参加費は、大人1000円

【申込み】講演会は、申込み不要です。

茶話会に参加される方は、FAX、またはEメールで、友の会事務局までお申込みください。

【宛て先】(FAX) 0465-23-8846 友の会事務局宛

(E-mail) tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp

【問合せ】田口 tagu@nh.kanagawa-museum.jp

〈各部会の活動募集 応募方法〉

関心のある方は、お名前、メールアドレス、会員番号、参加したい活動を明記のうえ、友の会のメールアドレスまたはFAXでお問い合わせください。

**** 行事への参加申込み方法 ****

-詳細はチラシをごらんください-

受付 各行事案内の申込み方法に従い、普通はがきまたは往復はがきでお申込みください。FAXやEメールでは受け付けできません。

記入 行事名/参加者全員の氏名/年齢(学年)/会員番号/代表者の住所、電話番号を明記、指定の必要事項などもご記入ください。

宛て先 生命の星・地球博物館 友の会事務局 (主催者名を記載) までお送りください。

締切り 各行事案内の指定期日までに必着。

その他 指定のある場合のみ、Eメールでも受け付けできます。

問合せ 各行事案内に担当名が記載されています。なるべく夜間にご連絡ください。

発行:神奈川県立生命の星・地球博物館 友の会

Vol.9, No.1, 通巻48号 2005.4.10 発行

編集:友の会広報部

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL:0465-21-1515 FAX:0465-23-8846

Eメール:tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp